6月講演会報告
～言葉のプロが語る「令和の日本語」～

６月10日、ルネサンスクラシックス芦屋ルナ・ホールにて高殿円氏、浅井博章氏による「言葉のプロが語る・令和の日本語」と題しての興味深い対談でした。文章を書く専門家と話し言葉の専門家が新しく生まれていく言葉、意味が変わっていく言葉など日本語についての深掘りしての考察に思わず引き込まれました。

高殿円氏は作家/脚本家。平成12年角川学園小説大賞にて奨励賞デビュー。ライトノベルや漫画原作で多数のファンを獲得。平成21年には、一般向け文芸作品の第1作目となる『トッカン ―特別国税徴収官―』の連載をスタート。同作はテレビドラマ化されるなど大きな話題になりました。同じくテレビドラマ化された『上流階級 富久丸百貨店外商部』は芦屋山手から芦屋浜まで市内各所の情景が次々と描かれ、芦屋市の魅力が広く発信されており、芦屋市の知名度を広げるとともに、市の文化振興に大きく貢献されております。令和5年11月に第57回芦屋市民文化賞を芦屋川カレッジ学友会と共に受賞しました。芦屋市在住。

浅井 博章氏は神奈川県川崎市出身。早稲田大学法学部卒業。大学在学中にラジオDJとしてデビュー。以来、テレビ番組のMCや、各種イベントの司会・MC、CMやテレビゲームなどのナレーション、クラブDJなど、多岐にわたって活動中。現在は大阪のFM802で月・火の夕方（18～21時）「EVENING TAP」と日曜朝（7～12時）「SUPERFINE SUNDAY」の２番組を担当しているほか、埼玉のNACK5でレギュラー番組を担当、専門学校でヴォイスタレントを育成する講師も務めております。芦屋市在住。

参加者数は166名、担当は38期・企画Ｇでした。

浅井博章氏

高殿円氏

司会･越智会長

高殿：もともと私は文章を書くのが子供の頃から好きでしたが、実は難読症で、読むのは画像で処理するので、いわゆる螺旋状に。文庫があったら真ん中の文字からパーって螺旋状に広げていくっていう読み方をします。ラジオ、テレビとか映画が好きで映画会社とかエンターテインメントを作る会社に就職したいと思っていましたが、コスパよく自分で物語を生産するのは小説だと。

高殿：ら抜き言葉ってありますが、会話セリフでキャラクター性を表現する意味で正しい日本語じゃ困る時があります。

浅井：「光る君へ」の平安時代の言葉をそのままセリフにしたら全然意味が通じなくなる。「虎に翼」でもこの言葉はないでしょうっていう日本語が結構出てくる。

高殿：徳川家康を三河弁で書いたら誰も理解できないわけですが客商売なのでお客さんが求めるものを出すしかないんです。

浅井：我々が日常的に人と会話をする時に使っている言葉っていうのも、今の 10 代 20 代と 70 代 80 代の人とは違っているわけです。

浅井：辞書での扱いが揺れている言葉として

・辛い：辛党のことを塩辛いものが好きな人を意味する言葉として使っているようですけど、お酒を好む人という意味がある。

・浮足立つ：ワクワクドキドキするようなことが起こりそうで、落ち着かないという時に使うことがありますが、本来の意味は恐怖心から逃げ腰になって落ち着かない様子。

・悩ましい：本来は官能が刺激されて心が乱れる思い。しかし、どうしたらいいか悩んでいる状態という意味で使われることが多くなっている。

・サクサク：もともと盛んに褒めそやすという意味があって、名声サクサクみたいな言い方をします。野菜を切る時の擬音のサクサクを語源としたようなんですね。パソコンが軽快に動く様子として使うようになったのはニフティーが 98 年にホームページが簡単に作れる「サクサク作成くん」というサービスから。

・にやける：漢字では若いという字に気持ちの気、そして送り仮名のル。貴族の偉い人のそばに仕えている男色の対象になる少年を指す。これが男が派手に着飾ったり、媚びて誘うような態度をとったりすることに。

日本語は生き物なんだから新しい言葉もどんどん生まれて古くからある言葉の意味が変わっていく。

浅井：インターネットの普及によって SNS で素人の人が書いた正しくない使われ方をしている言葉もある。

高殿： YouTube で字幕が間違っているとか。これは正しくないと思ってハラハラしちゃうんですけど、いちいちハラハラしているのはあまり意味のないことかなって。

浅井：ペースがインターネットが普及してからすごく早くなっている。最近の若い人たちはこういう言い方をするんだって、といってマスターした頃にはもう死語になっている。

高殿：TikTok、そしてショート動画。本当に短く。サクッと情報を摂取する。

高殿：皆さん日記つけてください。あなたたちの日記はめちゃくちゃいい文献になるから。素人さんが普通に書いたものの方が希少価値が高い。それが私のような作家を生み出したり、クリエイティブな方向に結びつけることがすごくある。全然違うところに住んでいる人たちを交流させて日記交換会をやりたい。知らない人と話すのはハードル高いけど素人の人が書いたものとかでも素敵だったりするとこの言葉自分でも使いたいとか。

浅井：皆さん自身が持っている言葉を大切にしながら、そして若い人が使っている新しい言葉とか言い回しに過度な拒絶反応をしないようにしながら、世代の格差があってもなんか楽しくお話、コミュニケーションを取ってもらえたらいいなと思います。

高殿：これは死語かなと思った言葉がいきなりぶり返して来たりするんです。だから言葉ってだんだん淘汰されるだけじゃなくて復活していくものもあって。肩パッドっていう言葉はずっと死んだなと思っていたら最近なんかみんな認知してるわけです。言葉だって復活してくることもあるんだなって思います。

Ｑ＆Ａ

いくつかの質問に丁寧にお答えいただきました。

1.カタカナ言葉が最近我々の世代から見ると多い。それについてはどうお考えでしょうか？

――――パーラーもやっていた資生堂の創業時、明治時代の新聞の投稿に「何で今の若いのはカフェって言うんだ。茶屋でいい」と書いてあります。いつの時代になってもそれが自然な感覚なんですね。定着していく言葉とそうじゃない言葉がありますけど、やっぱりどんどんこの先も増えていくとは思うんです。過敏にそんなのは日本語ではないなって言っても、これはもう止められない流れなのかもしれないですね。

2.漢字とひらがなの使い分けについて。

――――漢字をあえてひらがなにすることを『開く』といいます。逆に、ひらがなを漢字にすることを『閉じる』といいます。自分で楽しみたいと思っているのであれば、自己表現ですから、自分の内面に一番フィットするやり方を取ったらいい。ただ、発表したい、誰かに評価して

もらいたいという時は別で、自分はこうなんだけれども、どうだったら届くのかっていう側面が出てくる。
日本語は漢字、カタカナ、ひらがなを全部使いこなせないとダメじゃないですか。こんなに面倒くさい言葉を使っている私達って賢いんじゃないかなと思っています。今英語を教育しなきゃいけないとか言われていますけど、私は国語教育の方が大事なのではないのかってこれから声を上げていきたいと思います。

3.外国人への優しい日本語、わかりやすい日本語と推奨されていますが、外国人に伝わるわかりやすい日本語とはどのようなものになりますか。
――――その日本語は簡単とか優しいとかではなく、多分相手が興味があって、そして生活をしていく上で有益な情報を交換するのが一番いいんじゃないかなって思います。あそこは美味しいとかめっちゃいいとか、それから情報交換して。有益性が高いと優しい言葉っていうよりかえって簡単なんです。
留学生の子たちはまだ10代で驚くほど日本語を上手に話すんですよ。この難しい日本語を君たちがどこで覚えたんだろうかというとほぼ例外なくアニメで覚えましたと。興味のある分野であれば、自ずとその人の日本語力が向上していくと思います。

4. 例えば元々否定だけの「全然」という言葉の使われ方。日本の文化が痩せてきたのかな？貧しくなってきたのかな？と思います。ロゼッタストーンの最後の方に今の若い方と書いてあるそうですが、今、先生方のお話を聞いていて、我々の年齢が使わない言葉、意味を引いてみないとわからない表現がいくつかありました。
――――「全然」は元々は否定を伝えるようになっていたんですけれども、それがもう最近は肯定のみに使うことが増えてきている。「むっちゃ」とか。ひろゆきさんっていう人が言った言葉がすごく若者に流行って『それってあなたの感想ですよね』っていうのも一つの慣用句みたいになっていますよね。何を言われてもそれはあなたの感想ですよねって言われると何も言いたくなくなるみたいな。
今の子たちが多分50、60になったら日本語はひどいことになるなあと憂えるんですけど、リバイバルもありますしね。いろんな人に共通語は共有されていくみたいな文化があるので、皆さんはどう生きてくれても大丈夫、我々はもうこの歳まで生きていて勝ち組ですから、好きに言って健康を保つということですね。

（広報Ｇ・兵東 勇記）